

第31期社会教育委員の会議

第4回定例会

令和7年2月25日

【１】開催日時

令和７年２月２５日（火）１８時３０分～２０時３０分

【２】開催場所

教育会館３階 研修室「白鳥」

【３】出席委員

井上委員（議長）、堀井委員（副議長）、峯岸委員、牧岡委員、近藤委員、佐藤委員、
豊田委員、村内委員、吉田委員、新海委員

【４】出席職員

教育委員会事務局

渡邊生涯学習課長、富永社会教育係長、御園生社会教育担当係長、大坪社会教育係
係員

【５】傍聴人

無し

【６】次第

１ 第３回議事録の承認

２ 議事

（１）ミドル世代の特徴と傾向②

○全体での意見交換

３ その他

（１）今後のスケジュールについて

午後 6 時35分開議

○議長 では、少し遅れましたけれども、ただいまから第31期社会教育委員の会議「第4回定例会」を開催いたします。

少し遅れている方がいらっしゃるようですが、欠席ということではないんですね。

○事務局 はい。

○議長 それでは、本日の議事日程に沿って進めさせていただきます。

まず、第3回議事録の承認でございます。事務局より事前に送付されております。皆さんに御確認いただいていると思いますが、何か訂正等ございましたでしょうか。いかがでしょうか。大丈夫ですか。

では、問題がないようでしたら、承認していただきたいと思います。ありがとうございます。それでは、この会議終了後、吉田委員と堀井委員、署名をしていただきますようお願いします。

あわせて、今回の議事録の署名については、まだいらしていませんが、峯岸委員と佐藤委員にお願いしたいと思いますので、よろしくお願いします。

なお、修正の有無にかかわらず、後日事務局より完成版が配付されるということで、よろしくお願いいたします。

では、議事に移ります。前回の定例会では、ミドル世代をターゲットに考えていこうということで意見交換してまいりました。それをまとめたものが資料4となります。本日は、前回に引き続いて、ミドル世代の特徴と傾向を探るというテーマをさらに深めてまいりたいと思います。

事前に事務局から資料が送られており、お目通しいただいていると思いますが、意見交換を始める前に、事務局から資料の説明をお願いします。

○事務局 それでは、お手元の資料2、3、4を御覧ください。今、議長からお話がありましたが、事前に送らせていただきましたので、お目通しいただいているかと思いますが、改めて御説明させていただきます。また、参考資料については、時間の関係もありますので、説明は割愛させていただきます。

それでは、まず資料2を御覧ください。こちらの資料は参考資料をまとめたものでございます。

まずは、世田谷区の状況から見ていきたいと思います。まず、区の総人口でございますけれども、こちらは令和5年7月の世田谷区将来人口推計によるものでございます。全国

では減少傾向が続く中、世田谷区では令和6年より人口増に転じ、令和24年の93万7270人をピークに減少してまいります。

次に、男女人口でございますが、令和2年の国勢調査のデータでは、区の人口を男女別に見ますと、男性より女性の数が上回っております。

また、総世帯と1世帯当たりの人員ですが、一般世帯数は49万1717世帯で、平成27年度に比べて2万8433世帯、およそ6%増加した結果となっております。さらに家族類型別で見ますと、単独世帯数が最も多く、一般世帯総数の半数以上を占めております。こちらは参考資料にもデータが掲載してあったと思いますが、見ていただくと、既にもう2010年のデータにおいても、単独世帯が半数以上を占めておりまして、今後もこの傾向は続くものと思われます。

そして1世帯当たりの人数ですが、令和6年1月では1.85人となっております。令和2年では1.92人、平成27年では1.95と、世帯数は増加傾向にあるにもかかわらず、1世帯当たりの人口は今後も減少傾向が続くのではないかと思います。

次に、地域活動への参加経験・参加意向でございますが、こちらはミドル世代ではなく、区民意識調査から抜粋したものでございます。御参考までにおつけしておりますが、平成26年と令和6年と比べてみますと、「参加している」または「今後参加してみたい」を合わせた合計では、令和6年度はやや減少しております。減った要因は、コロナの影響も多少は関係しているんじゃないかと思います。

続いて、区内のミドル期シングルの数でございます。昨年12月の状況ですが、およそ11万人となっております。この人数の対象ですが、右側のミドル期シングルの定義にありますように、35～64歳までの方で、そのうちシングルの数が11万人となっております。

次に、インターネットからの情報ですが、独身研究家でマーケティングディレクターをされており、ソロ社会論及び非婚化する独身生活者研究の第一人者として様々なメディアに多数出席されている方の独自調査という形になりますが、2020年東京23区の未婚の一人暮らし男女の人口差でございますが、女性が多い区が御覧のとおり、30～60代以上で世田谷区が1位、20代では4位という結果になっております。ちなみに、男性は北区が20～40代で1位、50代で2位、60代以上が5位という結果になっております。

また、この方によりますと、女性にとっての世田谷区は、一人暮らしの未婚女性が住みやすい環境なのだろうと言われておりますが、なぜ女性のシングルが世田谷に多いのかという具体的な理由は不明でございます。

また、この方の別の著書では、東京の独身女性と独身男性では住む区が違うとも言っております。特に治安やセキュリティーにお金をかける女性と、安全面はさておき、飲食、遊びにお金をかける男性に分かれると。もはや完全に男性はダウンタウンに住み、女性はアップタウンに住む状況であるという独自の見解も言われております。

次に、「ミドル期シングルとは」でございますが、こちらは先ほどもお話しさせていただいたように、前回、議長から御紹介いただいた著書からまとめたものでございます。

ミドル期シングルの定義ですが、ミドル期とは35～64歳までを対象として、35～49歳をミドル期前期、50～64歳までをミドル期後期と定めております。

そして、シングルは未婚者だけを指すのではなく、有配偶者、離別者、死別者、離婚されたり、お亡くなりになったり、それから有配偶者でも、お子さんが独立されたり、あるいは結婚されていても、一人になる時間を多分皆様お持ちになっている場合もあるかと思いますが、そういう形も含めてこの本では考えていると言われております。

そして、ミドル期シングルと地域コミュニティですが、地域との関係が薄い理由を挙げております。主な理由としては、「子どもがいないため、引っ越しも自由で、学校での活動などにも参加しない」や、「現在の社会関係が十分満たされていると感じていれば、地域での社会関係は重視していない」、「地域を超えた場所で、友人と楽しく過ごす、煩わしいことや深刻なことは避けたい、なるべく地域で面倒な人間関係は持ちたくない」という方が多いようです。

ですので、資料3のアンケート調査にもありますように、東京ミドル期シングルたちは、親や仕事関係だけでなく、趣味などを通して活発な社会関係を築いている人が少なくなく、しかも、そこでつながった友人の多くは、必ずしも地域内に居住しているわけではありません。むしろ地域以外の場所で暮らしており、何かあるときだけつながる傾向があるようです。

また、地域については、居住する場所としての利便性や快適性を重視しているようですが、居住地内の人間関係は特に気にしていないような傾向があります。気にしていないというのが正しいのか分かりませんが、自由を満喫するシングルたちは、何か不必要に拘束されたり、あるいは干渉されたり、煩わしい人間関係は極力避けたい暮らしをしたいという人たちが多くいるのではないかと思います。

しかし、何らかのきっかけで自分たちの大事にするものが受け入れられれば、決して強く地域での関係を拒否しているということではないという方もいらっしゃるようです。で

すので、アンケート調査では、「地域団体の集まりに参加したいのか」の問いに対して、最も高いのは「どちらともいえない」で、全体の約4割に当たります。ということは、約4人に1人は積極的に関わろうとはしていないが、何らかの機会があれば参加するだろうという潜在的なミドル期シングルたちがいるということも見逃せないのではないかなと思います。

では、どうすればシングルたちは関わることができるのか、「仕組みづくり、場づくりに何が必要か」では、従来の所属するコミュニティではなく出入り自由で、かつ幅広く緩い活動であることや、家族形態ではなく個人としての関わりを持たせる地域グループの在り方にシフトしていくこと。そして、個人参加した際に浮いた存在にならない仕組みが必要で、さらには何らかの役割を持たせること。例えばですが、子ども食堂の範囲を広げて、シングルたちも通うことができ、いずれ運営側のスタッフとして活動するように、何らかの役割の担い手として活動に参加する道を探ることも重要ではないかと言われています。とはいっても、シングルの方たちに、だからといって結婚すべきだとか、子どもを持つべきではとか、そういうことを言うことではないということも言っています。ここは注意すべき視点ではないかなと思います。

続いて、資料3について、こちらは少し古い資料にはなりますが、令和元年に特別区長会調査研究機構が調査したものでございます。どうして世田谷区が言われたのか、選ばれたのかは不明でございますが、世田谷区、豊島区、墨田区の在住35～64歳の単独世帯の単身者からアンケート調査をした結果を抜粋したものでございます。世田谷区のデータ以外は全て3区の合計としたものでございますので、御参考までに数字の高いものには網掛けをしてございます。

そして資料4は、前回の定例会をホワイトボードにまとめたものでございます。

簡単ではございますが、私からの説明は以上でございます。

○議長 ありがとうございます。たくさん資料があるので、全てを把握するのが大変かもしれませんが、事前にお渡ししてあるものです。

これを見ると、恐らく、ああ、そうなんだと新しく知ることが幾つもあったのではないかと思います。例えば、世田谷って30～60代の女性が多い区だそうです。知りませんでした。

○委員 はい。

○委員 そうですね。

○議長 今期は、ミドル期のシングルの方を考えようとしているわけですがけれども、どういう人なのかというのがなかなかつかみにくい。こうした研究によると、例えば、「都会のよさ、干渉されたくない、自由を楽しんでいる、地域で面倒なことはしたくない、でも強く地域の活動を拒否しているわけでもない」というような特徴がある、と整理をされます。これが本当に正しいかどうかという問題はあると思いますが、なるほど、と思うところもおありなのではないでしょうか。

こうした先行研究には、地域社会はミドルシングルの存在を認め、結婚しないから駄目だというような枠組みで捉えるのではなくて、それぞれのよさ、それぞれの嗜好性などを大事にしながら、ミドル期シングルの役割を考えていくことが大事なんじゃないか。押しつけるのではなく、地域のなかに取り入れていくことが必要なのではないか。ミドル期シングルが浮いた存在にならないようにすることが大事ではないかということが書かれていました。

本日は、全体での意見交換として、それぞれの方が資料をお読みになったりして、お考えのことは出し合っていただければと思いますが、いかがでしょうか。

○委員 資料を見てから、事務局に御意見を送らせていただいたんですけれども、世田谷区は、若者支援についてはすごく特殊な区ではないですか。私、子ども・青少年協議に関わってまして、39歳まで若者ですよ。

○事務局 はい。

○委員 対象にしていたのが、今年か何か、そこを撤廃しましたよね。

年齢を上げましたよね。それはやっぱりひきこもりの方がすごく多い、それ以上の年齢の方が多かったので上げたということで、そういうことを考えると、このミドル世代というのが若者の大きい人というか、そういうことでもあるんだなと思って、ここでそういうことを討議するときに、ついつい子どもとは違うというふうに思いがちなんです、多分、学校だったり、PTAだったりというのは思いがちなんですけれども、子ども・若者が引き継ぎ年を取って行って、若者の延長というんですか、その対策というふうに考えを切り替えたほうが、私はとてもやりやすいし、皆さんもそうじゃないかなとちょっと思って、今日はそのお話をできればと思っています。

今度、子ども条例が子どもの権利条例に名称が変更になりますよね。子ども・若者総合計画も今度作成されるじゃないですか。それで、既に臨床心理の御相談をされているメルクマールのほうは、たしか49歳までが対象になっていますよね。

○事務局 具体的な数字は分かりませんが、多分8050という、80歳の親が50歳のお子さんの面倒を見るという問題でしょうか。

○委員 そうですね。そういう意味では本当に堂々こちらのミドル世代を、そういうふうにはたくさん問題、課題を抱えている方がたくさんになっている。そのいろんな世田谷区の政策の現状を、ここのテーブルで共有する機会があったほうが、漠然とミドル世代の特徴とか言われても、それをどうするというのはなかなか考えにくいんじゃないかなと思って、事前に事務局にメールをさせていただいたんですけれども、それについてはいかなものですか。今日、何かあるかなと思ったらなかったの。

○事務局 まだそこまで、個人的なやり取りというところもありましたので出してはいないんですが、そういうところも含めて、10人の委員の皆さんでお話ししていただければと思っております。

ついでながらお話ししますと、今回は今年度最後の定例会になります。来年度は4回予定しておりますが、最終的には社会教育行政においてミドル世代の方たちにどうアプローチしていくかを来年度は迫っていききたいなということで、今回は皆さんにイメージしやすいように、宿題のような形になってしまいましたが、それぞれ10人の方たちは既存の活動をされていますので、例えばおやじの会、子どもぶんか村、あるいはPTA経験者、青少年委員、そういう既存の団体にミドル世代の方たちが関わってもらうためにはどうしたらいいのか。そういうところから出発してイメージを広げていただいたほうがやりやすいのではないかということも考えました。いやいや、そこだけではなくて、例えば福祉領域になるのかどうか、そういうところまで範囲を広げてやったほうがいいんじゃないかというお考えなのかどうかというのは、この中で議論していただければと思います。

○委員 私はそれが提案です。広いとおっしゃったけれども、情報としては、考えるときにあるべき情報だと思うんですよ。世田谷区の住民の方たちのことを考えるんですから、そういう情報は一度共有したほうがいいなと思っています。

○委員 前回出られなかったのですが、この資料を見させてもらって、非常に面白い、興味深い、しかも、おやじの会をやる上で、ふだん考えていることと非常にマッチしていると思っていて、今の段階で僕の中での答えは幾つかあるんです。

この会でも前に申し上げたように、おやじの会は、子どもがいないと入ってこられないので、ミドル世代はどうするのというのは最大の問題だと思っています。また、町会の役員もやっていて、学校とつながりは結構ありますけれども、町会が高齢化している中で、

どうやったら地域の人に入ってもらえるかというのは、どの町内会でも最大の問題だと思います。

答えは何かないというのを常に考えている中で、おやじの会の勧誘のときもかなり関わりますけれども、ここに書いてあるミドル世代の対応そのまま、あんまり地域と関わると人間関係が面倒くさくなるとかいうところから、なかなかおやじの会の活動に入ってくれないお父さんたちは結構いて、特に共働き世帯とかはもう時間がないし、学校や地域の活動に参加する時間がないという物理的な問題があるんですけれども、でも、よくよく考えてみると、おやじの会をやっている、結局、子どもが大きくなって、ここでいうミドル世代というか、一人世帯というか、死別の場合もあるだろうし、夫婦2人だけになって、時間的な余裕もできたりして、その段階になると地域の中になかなか入れないという問題もあったりするんです。

町会やおやじの会に勧誘といったところを常々考えている中で、僕の中の結論としては、おやじの会の勧誘で一番結束をつなげるための手段として、この会でも前に申し上げたと思うんですけれども、お酒を一緒に飲んで意気投合すると一気に距離が縮まる手段というか、ツールというか、やり方というのが非常に常套手段としてあるんですけれども、そういう何か気持ちのハードルを超えるような取組というのが、飲みに行くというのが一番分かりやすいんです。

だから、そこから町会の活動をしていて思うのは、お祭りというキーワードが、子ども関係なく地域に住んでいる人たちをみんな巻き込んで、しかも、お酒を飲んで一気に意気投合したら、結束が強まるんじゃないかなというのが僕の中の一つの答えです。地域のお祭りで、おみこしの担ぎ手がいなかったり困っていたりするという現状があると思うんですけれども、そういうところにおやじの会のメンバーを誘って行ったりしています。もっと地域のお祭り自体の活性化と、そこに参加者を増やすということが一つのツールというか、やり方としては近いんじゃないかなと思っているのが1つ。

もう一つは、オール世田谷おやじの会の会長をやっている、おやじのイベントを盛り上げるためにどうするかというので実際にやっていますけれども、それはスポーツ。一緒に結託して共通の敵と戦うと、そのチーム内の結束力は断然上がるので、スポーツを通して地域のコミュニティだったり、結束力を強めるというのが地域の中でもできないのかなというふうには思っていて、おやじの会のスポーツイベントをやっていますけれども、各おやじの会がフットサルとかソフトボールとかチームをつくって、競技をオール世田谷とし

ては企画しているんです。そうすると、もう信じられないぐらいみんな一生懸命。そこまでやらなくてもいいのにといいぐらい一生懸命で、もうおやじたちは、試合のときに勝つために緊張すらしているんですね。別にお金や商品がすごくあるわけでもないのに、何もってこんなに意識が高まり、地域の活動に一生懸命になるんだろかなと考えると、やっぱり共通の敵がいて、そこで自分たちは勝ちたいという思いがそうさせるんじゃないかなというふうに思っていて、お祭りとスポーツというのが今のところ考えている大きな柱なんです。

その先に考えているのは、やっぱりこの資料の中にも出てきましたけれども、自分の利益になるためだったらやるんですよ。やらされるとやらないんだけど。そう考えると、趣味とか、そういうつながりのあるグループだったり、そういう活動を促進すると、その中に入ってくる人たちは非常に結束が強まるんじゃないかなと。

ソフトボールをやっていると思うのは、プロ野球のファンが、広島ファングループとか阪神ファングループとかをつくって飲みに行ったりしているんですけども、話を聞いていると、ファンの話でめっちゃめっちゃ盛り上がっているんですよ。あいつはどうだとか、今度ああいうトレードがあったからどうだとか。そういう趣味でのつながりによって、仕事も関係ないし、全然つながりがなかった人たちが、そこまで結束してコミュニティ力を高めるかというのを見ていると、僕の中で今思っているのはその3つです。お祭りとスポーツと趣味のつながりを地域の中でもっと活性化させる取組をすれば、このミドル世代だったり、地域のおやじたちをつなげることができるんじゃないかなと思って、今、日々そういう活動をしています。

○議長　ありがとうございます。今の委員の話は、おやじの会は、子どもがいて、もとの定義からすればシングルではないのだけれども、しかし、おやじの会も、子どもも大きくなってくれば、ミドルで一人という意味では似ているのではないかな。そういった人たちにアプローチしていくために、3つの方法が有効ではないか、というお話でした。

委員のお話は、いわゆる「引きこもり」と言われるような人たちも、ここでいうところのミドル世代の方がいるはずなので、入っているということから、そういう人たちについての共通理解も必要じゃないかということですか。

○委員　ということではなくて、それも含めて世田谷区の特異な、それだけじゃない若者に対する政策です。若者といっても20代じゃないわけだから、世田谷区が考えていることが。ミドル世代も入れて若者政策というふうにやっているの、その政策について皆さ

んで情報共有したらと思ったんです。

○議長 世田谷区が「若者」という言葉に込めているイメージが、一般的な「若者」とは違う、ということなのですね。

○委員 そうなんですよ。

最終的に私たちが何か考えるとしたら、結局、このグラフでいう「参加している」、「今は参加していないが、今後参加してみたい」、「参加していない」とあるとしたら、参加していないが参加してみたい人が参加する状態にいかになるかを考えればいいということで、それぞれの所属している団体が、いかにその人たちに参加してもらうようにできるかという工夫を今日出しましょうということだったんだろうなと思うんです。それは思っていましたけれども。

○委員 青少年委員という立場でミドルシングルとぽんと飛びますと、全然想像つかないというのが事実なんです。今現在、活動している青少年委員は、小学生、中学生の健全育成を主としての活動なんです。その中で、これを育てていけばということで考えていたんですが、やはり小学校でいいますと挨拶運動ですね。一番コミュニケーションの基礎となる挨拶運動がありまして、そういう心を育てていけば、ミドルシングルになったとしても、人と会うコミュニケーションのツールの一番最初は挨拶だということを教育する、教え込む。それは昔からやっていると思うんです。

それと同時に、先ほど委員が言った小学校のおやじの会で、今、子どもたちとおやじが月1回、ボランティア活動で地域の清掃をしているんです。登下校の場所ですね。それはシングルじゃないんですが、お父さんとお子さんが一緒になって地域のごみ拾いを行う。今度、そのお子さんたちが育っていったときに、そういう体験がよかったということをそのまま思いにして、そのまま育っていただいて、自分はそれなりのときにずっと地域に入るんだ、そういうことは大切だということを教育していくのも大切だというのがあります。

また、やはりおやじの会主催でサッカー部、おやじがサッカーを指導しています。そこで育った子どもたちが、やはり大学ですとか大人になってから、今度、後輩を育てに来てくれるんです。ですから、そういう空気感も大切にして、それがずっとそのままミドルシングルになったとしても子どもたちと接点があり、教え込む楽しさ、先ほどの利益じゃないんですが自分の趣味に対する、それは野球も一緒に、スポーツ全般ですけども、そういうことで卒業生がOBとして子どもたちを育てていって、その中で地域貢献。そのうち、妻帯者、もしくはシングル同士でも地域とのつながりになるんじゃないか。やはりそれを子

どものときから育てていくのは大切だということと同時に、今現在そういう事例が出ている。

もう一つが、私、青少年絡みで野毛青少年交流センターの運営委員会も携わらせていただいているんですが、そこではイベントがあると、中学生、高校生、大学生が世代を超えて一つのテーマ、イベント事を企画しているんです。みんな一緒に一つのイベントに対して真剣に取り組んで、どういったもので地域の仲間を、子どもたちを呼ぶかというのに取り組んで、実際に今、年2回、野毛青フェスティバルということでやっております。

子どもたちの企画で進んでいるものは、やっぱり大人としてもすごく大切に見守ってやっている。彼らが、例えば大学を卒業して社会人になっちゃったらもう終わりではなくて、地域貢献の自分たちの取組、企画なんです。それは地域の子どもたちをいかに集めるかという思いをそのまま育てていってあげて、大人になったとしても、その大切さ、シングルになってもその場所に戻れて、ものをつくり上げるというものを、今度、新しい子どもたちと一緒に。また地域全体として、お祭り事にしろ、地域のイベント、商店街のイベントにしても、ずっと入れるような地域の心持ちというか教育を子どものうちから大切にしていけるのが大切じゃないかと思うんです。

ただ、今言っているのは全部そこで育っている子どもたちなので、例えば世田谷区に人口が増えた、いろんなところから来たときに、そこで育った子どもたち、ミドル世代になった人たちが、今度新しくここに住んでいる人たちを取り込むというのはちょっとまだ見えていないんですが、そういう空気感があれば、新しい人たちがシングルで来たとしても、入りやすい空間をつくってくれるんじゃないかなというイメージがある。

○議長 ありがとうございます。ほかにいかがでしょうか。

○委員 私も事務局に自分の団体のことを考えてきてくださいと言われたので、考えてきました。私は、こども劇場せたがやという団体なんです。子どものための舞台と一緒に見ているんですけれども、ゼロ歳から18歳までの子どもが対象なので、18歳が見る舞台というのは大人が見る舞台なんですね。もう大人対象の舞台を見ているんです。そういうときには空席のチケット売りをするんですけれども、大人の方もいらっしゃる、若い方も、ミドル世代の方もお見えになるので、そういうときに、私たちの会の活動に参加してもいいなという入り口を設けるといいなというのは、あんまり考えたことはなかったんですが、事務局に言われて、それはいいなと思いました。ついつい大人や子どもを持っている人を会員にしたいというのがすごくあったんですけれども、子どもがいらっしゃらない、本当

にフリーの方たちに会員になってもらって活動できるようにするのはありだなと、すごく思いました。

実際、会員になった方もいるんです。私がやっている太極拳で御一緒していた方が、劇を見られるけれども、一緒に入会して会員にならない？と言ったら、お子さんがいらっしゃる方で御夫婦が、50代で会員になった方もいらっしゃるのです、すごくハードルが低いというか、劇を見るだけとか、コンサートに参加するだけというのでも何かちょっと仕掛けがあれば、つながる活動とか参画できる活動に参加するような仕掛けはできるなと、思った次第です。

あと私は、若者と咲かせるネットワークといって、若者を支援する人たち、支援者のほうの交流を促進している会の事務局をやっているんですけども、そこでは結構、個人の参加もオーケーなので交流会を発信すると、個人でお子さんがいらっしゃる方、だから仕事をしている方だけじゃなくて参加されることもありますね。委員がおっしゃったように、毎回その交流会の後は飲み会をするので、そういう方が飲み会に参加されたら一緒に話をしたりというのは、すごく効果があるなと思いました。

あと私、多分おやじの会だったところか、千歳台小のちとせだいきっずというのがあって、それは親御さんばかりが所属していて、お祭りとか学習支援もやっていらっしゃるどころなんだけれども、そこに知り合がいて、お祭りをやると聞いて、私も手伝いたいんだけれどもと言ったら、それに入ってと言われたので、それに入りました。この間、お祭りのお手伝いをしてきたんですけども、そういう行事のときにやれるものが広報されると、ちょっと入ってみるか。

だから、おやじの会じゃなくて、いろいろあるじゃないですか。そういうので皆さんに分かるように、募集しています、地域の方、一緒にこういうのをやりませんかというのがあれば、何かふらっと入るかもしれないというのもあるかなと思うんです。以上です。

○議長 ありがとうございます。ほかの方、いかがでしょうか。

○委員 関係ないかもしれませんがアクティブシニアと言われている人たちがどんどん増えていると思うので、定年しても、定年を迎えて地域で何をしたらいいのか分からないおやじ、僕が考えるのはおやじが主体なんですけれども、そういう人たちを地域の活動だったり、子どもたちの活動だったり、育児支援だったり、そういう地域のお困り事に一緒に協力してやりましょうみたいな仕組みはないのかなと思っていて、それはどこがやるんだろう、町内会がやるのかなとか。でも、町内会って、もう高齢の方ばかりになっ

ているから、そこがちょうど抜けていて、なかなかアクティブシニア世代も町内会に入りづらい感じの構図になっている気がするなと思っています。

このアクティブシニアの活用というのが、とても社会的な課題でもあり、取り組むべき活用方法なんじゃないかなと思っているのと、もう一つ、日本とかアメリカとか中国とかで、60歳以上のシニアに対するアンケートですごく面白いデータがあって、「長生きしたいですか」という単純な質問を例えばその3つの国にした場合、中国とアメリカは80～90%が「長生きしたい」と言うんだけど、日本人だけ30%とかなんです。これはとても悲しいデータだと思っていて、その背景にあるのが、「年を取ってから周りに迷惑をかけたくない」と。日本人の何とも美しくもあり、周りを気遣うのがベースにあると言われていますけれども、いわゆる健康寿命を延ばして長生きするのがとてもいいことなんだというふうに変わらないかなと、そのデータを見て思ったところです。アクティブシニアの活用ということで、ちょっと取り留めのない話ですけれども、そういうのをふだん考えています。

○委員 アクティブシニアって何歳から何歳ぐらいまでですか。

○委員 よく言われるのが、サラリーマンだったら60歳、65歳で定年になって仕事を離れて、時間はあるけれども。

○委員 動けるシニアという意味の？

○委員 そう。

○議長 定年退職しても、元気だったら、何か新しいこと、人の役に立つことしたい。そういう気持ちがあっても、どういうふうに関わったらよいかかわからない人は多いと思うのですが、委員だったら、そういう人にどんなふうにアプローチをしていけますか。

○委員 とても分かりやすいのが、この資料の中にあるように、今の日本人のアンケートで長生きしたくないという背景にもあるように、シングルの一人世帯になったときに最大の問題は、健康でいれるかどうか。みんなに迷惑をかけて、体も動かなくなってお金もかかるし、自分が誰にも面倒を見てもらえない状態になったときの不安感、この資料にもあるように、最大の問題じゃないですか。それを解決してあげることができれば、そのアクティブシニアにとっては最大のメリットになるので、どんどん入ってくると思うんですよ。

妄想ですけれども、地域の活動に参加したらポイント制とかにして、ボランティアに参加したので何ポイントみたいなもので、何歩歩いたら1ポイントあげますよみたいな、健康促進のためにやっているようなアプリ。ああいうイメージですけれども、何かイベント

に参加したら何ポイント付与。ポイントがたまったら、あなたは優先的にこの老人ホームに入れますとか、あなたは年取ったときにこういうメリットがありますみたいな。それは地域の活動だったり、ボランティアだったり、みんなが喜ぶようなことに対して積極的に活動していた見返りとしてそういうのがあるとか、できないかなと思います。

○委員 私は、今おっしゃられたこと、実は同じようなことを考えていまして、よく大学でボランティアすると単位をもらえるというのがあったじゃないですか。それで、シニアシングルに地域貢献で所得税をポイントで、納税の額を融通する。そうすると皆さん出てくるんじゃないのかなと。

言い方は悪いんですけども、まず納税から、所得税は今なんだかんだやっていますから、地域貢献で所得税を下げるとか、そういうことをやっていったら間違いなく出てくるんじゃないかなという案も。委員の話を聞いていて、私もそういうのが一番。実際、大学は本当にそれがあったのかどうか、うわさでは地域貢献をするとポイントをあげるという話は聞いたことはあるんですが、それが大人版になって、そういう発想もあるのかなと、イメージはしていたところです。

○委員 さっきの話ですが、この表でいう「参加している」、どこに参加しているのか分からないですけども、その団体なり活動なり企画なりが人を増やしていく仕掛けがあれば増えていくという、さっきいろんな団体の方が自分の会にとって増やしていくためにはどうしたらいいかを考えるのと同じで、いろんな団体がそういうふうを増やしていくことができれば、ここの参加してみたいと思っている人たちがどんどん参加していくということとは一つあるじゃないですか。

そうすると、さっきのポイントとかもありますけれども、例えば今、世田谷区は講師助成金を出していらっしゃるじゃないですか。そういうことをもうちょっと増やすとか広めることで簡単にそういう企画ができる仕掛け、機会を増やすと、そこに参加する人が増える。でも、そこだけじゃなくて、例えばそことほかの企画をやった団体が交流する場をつくるとか、そうすると、そこで交流することによってもうちょっと広がりができると思ったんですね。

あとはもう新しい企画を考えていくとか、補助金制度をつくっていくとか。そうすると、既存のところが頑張れば、参加していない人が参加するようになることはあるかなとは思ったんですけどもね。

○事務局 皆様のお手元に参考資料「令和6年度文字・活字文化の日記念講演会」チラシ

をおつけいたしました。

なぜつけたかという、直近、生涯学習部の中でこういったことをやっているのかなと調べたときに、昨年11月2日、これは中央図書館主催なんですが、11月2日ということで文字・活字文化の日の記念講演で、お笑い芸人の図書館司書の資格をお持ちの方を呼んで企画をされたそうです。実は、ミドル世代を対象にということではないんですが、ただ、非来館者層が30～40代なんだそうです。その人たちに来てもらおうと企画してみたものの、やはり著名な方であっても、その世代の人たちは少なかったと言っていました。

ちなみに、350人定員のところ、申込みが288人あったそうです。ですから抽選しないでみんな当選したんですが、キャンセル率は31%で、実際に来場した方が199人。どうやって申込みされたのかというのは、電話10件、オンライン申請278件ということで、基本的にはもうスマホ、あるいはパソコンですね。いろんなところにチラシをまいたりもしているんですが、やっぱり来てほしい30～40代の層にはなかなかヒットすることができなかったということは言っていました。

では、どうしたらヒットできるのかというのが今後の課題になってくるということなので、役所のいろんな事業化もそうですし、団体さんもそうだと思うんですが、何とか集めたい。ただ、今回やろうとしているミドル世代の方たちが、趣味とか興味関心もいろいろ違う中で、何にヒットするのか、どういう広報手段にすればヒットするのか。ここら辺が難しいところなんだろうなと感じたところです。

○議長 今のお話ですが、この企画は、どこにヒットさせようとして、結果としてどの層が集まって、どこが集まっていないのか、もう一度、整理していただけますか。

○事務局 この事業に関して、年齢層を取っていなかったということなんですね。具体的に見た感じで30～40代はいなかったと判断されたと思うんですが、実際に何十代が多くてというのは取ってはいないらしいです。高齢者が多いということは聞いています。11月2日は3連休の土曜日という時期が関係しているかどうかは全くなくはないと思うんですが。

○議長 データとしては残っていないけれど、ミドルを集めようと思ったら、シニアが多かった、と捉えていいんですね。

○事務局 ミドル世代というふうには言っていないんですが、担当者に聞いたところ、30代、40代、この代が非来館者層で、そこを集めたかったんだということで。ただ、なかなか集まりにくかったということは聞いています。

○委員 その紙、チラシはどこで配ったんですか。

○事務局 「区のおしらせ」等々には掲載したり、各図書館、区の関係機関にチラシを配架していると思います。

○委員 「区のおしらせ」も、各家庭に配ってはいないですね。

○事務局 「区のおしらせ」は、新聞を取っている世帯には届きます。

○委員 だけですよね。うちは来ていない。僕は学校関係なので、まちづくりセンターとか、そういうところに行くところというのがいっぱいありますけれども、やっぱり30代とか40代の方は、そこにまず行かないと思うんですよね。だから、今おっしゃったように、広報的な活動をどうするかというのは、一つの大きな問題なのかなと思いました。多分、30代、40代は見てもないんじゃないかなと。

○事務局 そのミドル世代の方たちがということですね。

○委員 そうですね、見ていないんじゃないかと。まちづくりセンターとか、そういうところに行かれる方は、僕も業務でよく行くので取るんですけれども、そういうところにつながない方であれば、特に独身のミドル層の方はそういうところにすら行かないので、こういうことがあることをどう知るかということのほうが、もしかしたら大変なのかもしれないかなと思います。

○議長 委員もちょっと言われて、意味が分からなかったんですけども、まず、そもそも、「役所的な広報」がよいかどうかという議論と、それから、そのターゲットとなっている人がそうした情報をどのように入手するのか、という話がごっちゃになっているので議論しにくいのですが、こういう企画をするときに、ミドルを集めるにはどのように情報を伝えていくことが適切かを考えてほしいということなんですか。

○事務局 はい。今後はそういう形にもなってくると思います。今までどおりの形でいきますと、今、委員が言われたように、例えば「区のおしらせ」はそもそも見ないだろうとか、ミドルの世代の方たちは、ネットであったとしても区のホームページも見ないだろうとか、ましてや図書館、まちづくりセンター等々、そういう関係機関にもなかなか足を運びにくいというか、行かないので。

○委員 これは実現不可能かもしれませんが、例えば4年に1回とか何年に1回選挙がありますよね。あの選挙の封筒の中にチラシみたいな感じで一緒に送るとか。要するに、全員にきちんと送れるような状態じゃないと駄目だと。あと、健康診断で40歳だと何か割引があるとか、検便とか何とかと来ますよね。ああいうのに、それじゃないけれども

ちょっとチラシみたいな。それは区の中でこれぞというのを選んで、そこにもう30代、40代に来てほしいというのを明記して。そういうようなのほうが確実なのかと。実現不可能かもしれないですけども。

○議長 実現不可能かどうかの前に、いろいろとアイデアを出していくことが大事だと思いますので、そこまで気にせずに、いろんなことを言っていたいたほうが。

○委員 また、こういう案内がこういうホームページにあるという案内を1枚入れるだけでいいかもしれない。健康診断と選挙は必ず見ますから。見ない人もいるかもしれませんが。僕、世田谷区民なので、いつも区からそういうのをいただいているので。

○委員 これはXとかインスタとかに告知はしているんですか。

○事務局 区のSNSでしています。

○委員 思うんですけども、30代、40代って忙しくて本を読まないですよ。だから多分、これを知っても全く刺さらないんじゃないかという気はしますけれどもね。

○事務局 お話はよかった、アンケートの調査結果からも好評だったということで、いらした方にはよかったと思います。

○委員 もう本を最近読まないの分らないんですけども、30代、40代の方が今すごく読んでいる作家とかはいないんですか。

○事務局 それはちょっと、まだそこまでは調べていないので。

○委員 そういう方のほうが集まるのかなとちょっと思ったけれども。だって、読んでいる人に来てもらいたいわけだから。対象が図書館に来る人の30代、40代だからと思ったんですよ。だから、この方が何か本を出して、それが30代、40代の人にヒットしているんだったらいいかもしれない。

○事務局 ただ、190何名の方が参加されたということなんですけれども、その講演の中で紹介された本に関しては問い合わせが結構あったということは言われています。

ただ、先ほども議長がお話しされたように、あまり制限したり絞り込んでしまうと、なかなかアイデアが出づらいのかなと思いますので、まずは自由にいろいろお話ししていただけるといいかなと思います。

○委員 宿題の件で、まだ僕は発言していなかったんですけども、お配りしたのは、部活動地域移行化ということです。今、中学校は全国的に、そして令和10年までの計画という形で区から出ていて、その先は地域移行化を10年までは緩やかに進めながら、10年度以降、地域移行化の完全実施を目指しているという話をいただいております。

ここに役割を担うような形でと資料の10ページの中にもあったんですけども、そういうところに力を貸していただけるようなミドル世代ができれば、例えば何でもいいんですが、本当に自分の得意な何かやっていることがあって、それを子ども2人3人と一緒に、7時ぐらいからでもいいし、土曜日の午前中だけでもいいし、それをやってくださっただけでも、それを部活動と学校が認めてやっていけばいいという感覚で地域移行化を進めていったらどうかと。そこを取りまとめることができれば。

外部委託という杉並区のようなもありますけれども、お金もかかるので、世田谷区の中でやるとしたら、地域学校連携課とか、こちらの課とか、例えば生活文化政策部の市民活動推進課とか、そういうところと連携をしながら、何か得意なものを生かして部活動の顧問になってくれる顧問一覧みたいなものができて、プラットフォーム化ができてやっていただけたら、どちらもウィン・ウィンで進めるのかなというような期待があります。以上です。

○委員 予算がどういう感じになるんです？

○委員 私はちょっと予算については分かりません。そこについても、講師は幾らもらえるのかということは今検討中だそうなので。そういうのができるといいんじゃないかなとは思っております。

○委員 それに貧富の差が関係しちゃうと、ちょっと心配になっちゃうんですけども。貧しい子は、月謝制になっちゃうと、やりたくてもやれないとか。

○委員 そこは、申し訳ないけれども、やっぱり自分の子どもを自分で育てているわけですから、それをやりたいという子どもがいて、余裕に合わせて、自分たちの経済状況を考えて何をやるかを選ぶのは家庭の責任であって、貧富の差というよりは、その家庭がどういうふうにお金を使うかによるわけですから、教育費をどうするか、そこまでも全部一律にするというのは、あまり好ましいことではないと思います。やはりそこを熱心にやりたいというのであれば、家庭はどこかを削ってでもそこにやりますし、いや、うちはもう旅行とかで楽しくやって、教育にはお金をかけないというのであればそれはそれで、そこは家庭の責任だと僕は思っております。

○委員 今の委員のお話で、部活動の件ですけども、私もバレーボールをしているので、何度か、今、顧問がいないので教えてくれないかと頼まれたこともあるんですが、当時、まだ40代ぐらいだったと思うんですけども、仕事を始めたところで、なかなか部活動をやっている時間帯に教えに行くことができない。物理的な条件もちょっと難しいものがある

ったのでお断りはしたんですけれども、さっき話題になっていたミドル世代にぜひその役割を担ってほしいと思っている方は多いと思うんです。やっぱりミドル世代って仕事もありますし、自分の家庭だったり、責任ある立場でもありますので、本当に絞られてくると思うんです。数少ない地域の人材を有効に使いたいという区の方針や国の方針も理解できなくはないんですけれども、やっぱり現実的にはなかなか難しいんじゃないかなというふうには感じております。

○委員 あと、委員がおっしゃっていたスポーツで集めるという、そこに中学生が参加しているだけでも部活動として認めてもらって、そこに行っていればもう部活動という形で調査書にも書けるような形にすればいいのかなと思っていて、一緒に楽しみながらやっているものも、それをそのまま部活動にすればいいかなと、地域学校連携課にもそういう話はしているんですけれども、そんな形で、もうちょっと緩やかな部活動でできたらいいかなと思っています。

○委員 そうですね、せっかくスポーツを始める機会で、すごくいいと思うんですけれども。

○委員 そうですね。スポーツだけではなく文化でも、さっきもちょっと申し上げましたけれども、月に1回のどこかの土曜日の午前中だけお相手してくれるだけでも、それで部活動と認めちゃって僕はいいと思っているんですね。それ以上、本気で何かをやりたいのであれば、先ほど申しましたように、御家庭が御家庭の意思でお金をきちんと使って、バレーボールでも強くなりたいとか何とかとなれば、それはそれでお金を自分で払ってやるということが大事なんじゃないかと思います。税金だけを当てにしてやっていくのは、もう限界があると僕は思います。

今までは学校の教員がそれを全部担ってやっていたから。その給料をもしもらったとしたら、大変な額になると思います。そこを国のほうで問題視して働き方改革というふうにおりてきているわけですから、そこは何とか地域移行化を私は実現したいと考えています。

○議長 そのほか、いかがでしょうか。本日は、前もって送られてきた資料を出発点として、いろんなことを考えていただければと思っておりますので。

○委員 来年度から、小学校、中学校、土日授業がなくなりますよね。そのときに、やはり働き方改革で当然土日が休みになる。子どもたちはせっかく土日、休みがあり、当然スポーツにしろ勉強にしろ、使う時間と、今度は指導者がうまく学校を使ってできるのかど

うか。今までは土曜日が登校日でしたら、それに部活を充てるとか、そこに地域の人たち、ボランティアの人たちが来て教えるというのは分かるんですが、今度、土日が封鎖しちゃったときに、子どもたちが登校できるのかというのはちょっと。

○委員 部活動は今でも土曜日は登校して、ないときでも運動部で試合が近いとか何かがあればやっています。何年か前に文部科学者のほうから、部活動のやり過ぎというので逆に言われて、必ず土日の1回は休むとか、週当たり何時間とか、何かそのような形を守りながらやっているんで、全部土日を使ってというのはもう禁止されているので、基本的には土曜日が多いと思いますけれども、試合に勝ち上がると日曜日ということもあります。そういう場合は対応していると思います。

○委員 じゃ、来年度から、勝ち上がったとしたら今までどおりに。

○委員 そうですね。あと、地域の行事かなにかも、例えば、防災関係なんかは非常に大事なことだと思っています。土曜日授業がなくなったというのは、土曜日が半日授業で振替を取らないのはなくなるということであって、例えばその日1日土曜日をやって、月曜日に振替の休みを取れば、できないことはないという形が私の認識の中であります。たしかそうだったと思います。完全にちゃんと調べなきゃいけないんですけども、そういうふうに僕は聞いているので、そういう形で、例えば体育大会とか合唱コンクールとか、そういうのはできますし、防災関係で何か1日取り組んで月曜日にお休みするならば、それはできることになっていると思います。

○委員 はい。ありがとうございます。

○議長 委員、いかがですか。

○委員 30代、40代のミドル世代で子育てしている人たちは、もう本当に大変な日々を送っているんですよね。稼がなきゃいけないし、育てなきゃいけない。それで、ミドル世代のシングルといったら、しかも、それが東京中心ではミドルはもうマジョリティーになると言っているんですよね。何かちょっと怖いというか、結局何もしない1日を過ごしているような人たちが大半いるんだろうなというのを想像してしまうんですよね。特に支援が必要なわけではないので、そういう手も届かないです。その人たちのシングルとしての存在を認めて、彼らの役割を考えていく。そして、もしそういうことがうまくいったら、非常時には大いに役立つ可能性がある。でも、それも私、そうだなと思って、能力がない人たちではないので、非常に能力は高いけれども、人と関わることはちょっとおっくうさを持っていて。

なので、子どもぶんか村で何ができるかといったら、もうお手上げだなという感じはするんですが、ただ、自分たちの行った小学校とか中学校とか、その体育館で何かスポーツをするといったら、それは行く可能性はあるんじゃないかなというのはちょっと思います。

これも、講演会は行かないですね、多分。これがアイドルの握手会とかといったら、抽選するぐらい30代、40代が殺到する。そんな人たちなので、それをどうしたらいいのかなというのは本当にちょっと分からないですけども。ただ、老後を不安に感じているとか、ちゃんと生活できるお金を自分は持てるのだろうかとか、あと30代、40代になって倒れている友達もたくさんいて、精神的に参っちゃっている人たちもたくさん見ていると、自分は頑張らないとすごくかたくなに思ったりしている面もあって、難しいなと思います。

○議長 委員、いかがですか。

○委員 おやじの会のお話、私はPTAですので、もうまさに本当にそのとおりだなと。というか、モチベーションがあつての話かなと思っていますので、モチベーションをどこに求めるかという、合理的なモチベーションはもはやあり得ない。これを言ってしまうたら身も蓋もないんですが、合理的なモチベーションを非常に立てにくい案件なんだろうなと思っています。ただ、合理的なモチベーションを持ってこようとすると、何かちょっとこれは違うんじゃないかというような御意見が出てきたりとか、多分そういうお題目なんだろうなと思いながら、この議論の困難さ、難しさをすごく感じているところではあります。

合理性を追求すればどうなるかという、やっぱり興味のないもの、あるいは面白くないもの、つまらないものという形になってしまうでしょうし、合理性を取っ払ってという話になると、いや、そういうのはちょっとという話になりがちなる。どこを取ればいいのかという、本当に難しいですね。

さっき、「令和6年度文字・活字文化の日記念講演会」のチラシを見て皆さんから御意見が出ていたように、もうちょっと違うアプローチがあつたんじゃないかというのは本当におっしゃるとおりで、本当にそれは合理性と非合理性のはざまを行けそうな感じのイベントだったんじゃないかなと、今さらながらですが私はそう思いました。ちょっと話がまとまらなくなってきちゃったんですけども、とにかく合理性と非合理性のはざまを議論しているこの会の難しさというのをすごく感じていますね。

私も、PTAの立場で何をどうと言われると、さっきのおやじの会の御意見というのは

本当に素晴らしいなと思いました。現実的であり、素晴らしいなと思いました。飲み会、確かに盛り上がります。スポーツで結託すれば盛り上がる。何かで仲よくなってしまえば盛り上がる。確かにそれはモチベーションとして使えるんですけども、それを表にばんと出して、はい、やるよといったときに、さてさて、何人ぐらい集められるのかというのがなかなか見えづらい。

あと、おやじの会というのが、PTAはほぼほぼ全員ぐらい参加しているわけですね。ほぼ全員ですが、今はもう全く全員ではなくなりました。いろんな会を抜ける。例えば私、東京都のほうもやっていまして、日本PTAもやっていたんですけども、日本PTAを東京都はもう抜けてしまったんですよ。そういう現実もある。

そんなところから考えると、おやじの会の母数と言われると、またまた少なくなってくるんです。そこに頼ってどうできるのかとなってくると、これもまた現実的には、集客としては非常に難しい部分が出てくる。悩ましいですよ、本当に。考えても、正直なところ、答えがあまり出てこなかった。ちょっと変な意見になってしまいましたが、そんなところですよ。

○議長 委員、いかがですか。

○委員 難しい話ですけども、公共施設を提供していただいたら集まる場が一つ。その中の一つは学校も含めて、休みとか夜とか。何をとなつたときには、今おっしゃったように、つまらないものには来ないわけで、そこには誰を呼ぶかというさっきからの話もありますが、いろんな趣味の人がいるので、いろいろなものを用意しなくちゃいけないのかなとか、漠然と思います。

今のままの学校では、あんまり外から人を入れることを好まないですよ、学校のほうが中心だからというので。だから、学校そのものも考えなきゃいけないのかなと。公共施設の一つと考えて、ただで使ってもらえるようなスペースというか、そういうのをシングルに対して積極的に出さなくちゃいけないのかなというふうにちょっと思います。その企画自体はスポーツかもしれないし、ほかのものかもしれないけれども、何でもかんでも子どもと絡めなくてもいいのかなと。でも、誰が管理するんだろうというところが解決できていない。誰が面倒見てくれるのかでしょうね。

あとは、楽しそうなことを見つけてくるには、このシングルの人たちがどういうことを楽しく思っているかを調べる必要があるかなとは思いますが、自分の学校のシングルの人たちにちょっと聞いてみたら、男の先生たち、本当にスポーツのチームに入ってい

る人たちが結構多いんですね。バスケット、サッカー、バレーとかテニスとかチームに入っていて、教員のチームの場合もあるけれども、地域のチーム、違う地域に行ってやっている人もいたり、あとは合唱をやっている人とか、楽団に入っている人とか、家族でバンドをやっている人とか、結構趣味を楽しんでいて、そういう人たちに、ここを貸すから使っていていいよとしてもいいのかなとか、あと、趣味がはっきりしない人に、取りあえず行ってみれば誰かいるよというふうな場の提供はどうなんだろうと。いろんな人がいるので、ちょっと危ない気もするけれども、行ってみたら、ぱっと開けたら何人かがいて、そこで何かできるかなとか、そのくらいしか今思いつかないですね。

○議長 今、学校も公共施設で、多様な使い方ができるけれども、校長先生に責任が全部あれば、それはもういろいろ考えなきゃいけないし、誰にでも貸すというわけにはいかないでしょうけれども、そういうのを全部別に考えるとするなら、学校は体育館もあるし、スポーツ施設もあるし、料理を作る場所もあるし、音楽室はあるし、図書室はあるし、集会場みたいなものはあるしと、考えるといろいろ使える可能性はある。ただ、それが学校長の責任においてとなってしまうと難しい。この図書館だって使おうと思えば使えるけれども、夜中使うわけにはいかないとかありますよね。

もしそこまで踏み込むのであれば、多分、新しい使い方ができる可能性はありますよね。でも、今までの規則とか、何かあったらどうするというふうに言われると、誰かそこに行けばいいよって楽しいけれども、変な人がいるかもしれないと思うとなかなかできないですよ。どうぞ土日もお使いくださいと言っても、その責任は後で学校長と言われちゃうと、いつもいるわけにはいかないしとなるので。そのあたりはどうなんでしょうか、行政の立場からして。

○事務局 なかなか難しいところもあるかもしれませんが、ただ、図書館でいうと、全国の図書館でも、一見、図書館なの？というぐらいすごいつくりになっていたり、1階にコンビニが入っていたり、あるいは有名なコーヒー店が入っていたりということで、これは全国の話になりますけれども、そういうふうにだんだん変わってきている。つまり、本を読むところだけではなくてきている。そういう公共施設も増えてきているというのは事実かなと思いますね。

ですから、静かなところで勉強したり、本を読んだりという昔のイメージではなくて、ふらっと入ってお茶をしたり、のんびりしたりというような、シングルの人たちがどうか分からないですけども、足を運びやすいような空間にはなっているんだろうと。集団

で何かをやるというよりは、個人個人が行きやすいような仕組み、空間にはなっているのではないかなというのは、中央図書館の職員の方からも教えていただきました。

○議長 新しい構想でつくった公共施設はそうなっていると思うのですが、今あるデザインは変えられないですね。

○事務局 そうですね。

○議長 施設のデザインは変えられないけれども、新しい使い方を工夫していくような計画や構想はあるのですか。そうしたことも、行政としてはハードルが高いのでしょうか。

○課長 例えば学校であれば、改築の際に、そのセキュリティーラインをしっかりと分けて、地域に開放した学校づくりをするというのは、我々も考え方としてはあるんですね。改築の機会をとらえて、そういうことはシフトしていけると思うんですけども、今ある既存の建物、区民会館なりを、実際、団体に対しては貸出しをしているので、そこを使っているんですけども、ミドル期シングルを対象としたような児童館的なものを新しく始めるには、なかなかハードルが高いのかなと思いますね。

○議長 そうですね。学校であれば、こちらのエントランスは生徒たちが、こちらからは地域の人が利用する、というように入り口が違ったり、セキュリティーがしっかりしているところでは、もう、地域に開かれた使い方をされているはずなんです。でも、建物の構造がそうっていないところを地域に開いていくには、どうすれば可能なのか。そのあたりを踏み込んで考えないと、新しい試みはしにくいですね。

今日は、委員のみなさまからいろんなご意見をうかがうことでよいと思うのですが、次回以降、何に絞って話をしていったらよろしいでしょうか。

○事務局 次回以降は、先ほどもお話をさせていただいたように、社会教育行政で行う事業をミドル世代にどういう形でアプローチしたら、今まで関わりが少なかったものが、少しずつ関わってくるようになるのかというところを次回を中心に、やっていければいいのかなと思っています。

○委員 そのミドル世代にたくさん関わっていただくと。いただいた結果、何を望んでいるのでしょうか。

○委員 同感です。私もそれが聞きたかった。

○事務局 最初から大人数を狙うというのはなかなか難しいと思うんです。さきほども言ったように、公共施設であったとしても、仮に図書館でもいいと思うんです、あるいは区民センターでもいいんですが、1階は大体ロビー機能があるので、例えば、実際、無

理かもしれませんが、そこが誰でも入れて、お休みできて、W i - F i も使うことができて、仕事もできて、お茶も飲めて、ちょっといい感じのB G Mなんか流れていて、仕事の途中でちょっと休んでみようかなとか、その合間合間に、あれ、区でこういうことをやっているのねとか、この施設はこういう施設なんだとか、あるいは、ここの施設でこういう団体がこんな活動をしているんだと目に入ること、感じてもらうことから何か出発してあるのかなというのはあるんですが、まずはすぐ関わらせようということはなかなか難しいと思うんです。

なので、まずはこういう公共施設を通じて、何かきっかけとして、あっ、世田谷に住んでいるけれども、何も知らなかったけれども、世田谷ってもしかしたら面白いところかもしれないとか、何かそういうきっかけみたいなものがないと、さきほどのチラシではないのですが、やりましようと言ってもなかなか難しいんじゃないかなというのは、私、個人的に感じているところであります。

○委員 すなわち、マジョリティーであるところのミドルシングル、50%以上ですか、その人たちに、世田谷区っていいぜと。あるいは、それを体感してもらって、体現してもらって、発信をしてもらいたいと。それによって世田谷区の人口減を防ぎ、税収を上げていく。簡単に言うとそんなイメージですか。そういうことではない？

○課長 いや、我々がやっているのは、あくまでも生涯学習社会の実現なので、全ての区民が生涯を通して学んで、その学んだ成果を地域課題に還元をしてというサイクルを生みたいんです。

この場で考えていただきたいのは、まずは役所のサービスをきっかけとして、地域社会とコネクションを持ってもらおうということです。その中で社会教育をやっていただきたいなと思っているんですよ。自分の趣味の中だけで終わらせるのではなくて、自分の持っている知識とか技能を地域に還元をする、そのような場を世田谷区内に幾つもつくっていききたいというふうに思っていて、そのためにはまず、いきなりこういう団体があるからそこに参加しろと言っても、多分誰も参加しないでしょうから、まずは世田谷のサービスを通して、地域と結びつくきっかけをつくってもらいたい。その延長に、その先に、自分の持っている技能とかを地域の人に教える。逆に、地域の活動を通して、地域の人を持っている技能とかいろんな知識を学んでいく。そういったサイクルを生み出したいんですよ。

単純に地域社会、地域コミュニティに参加してもらえればいいという目的もありますけれども、それは我々が本来目的としているところではなくて、その中でいかに学びがあっ

て、自分のウェルビーイングを高めていくために、いろんな活動が地域の中でできるか。そういった社会をつくっていききたいと。そのためのきっかけとして何ができるかを今考えたいなと思っているところですね。

○委員 を、この世代に求めたいと。

○課長 そうです。

○事務局 というのは、例えばお子さんがいれば、例えばP T Aを出発にして関わることは割と多いと思うんです。P T Aを卒業されても、いろんな地域に関わるということのは、多分皆さんほとんどそうだと思います。ただ、お子さんがいない方という、そもそも関わるきっかけがないということなので、何かそういうきっかけをまずつくっていかない限りは、いきなりそこに参加してくださいと言っても難しいだろうという気はしています。

○委員 そうすると、先ほど事務局が言われたように、その居場所を30代、40代の方が来られるような場所にするか、もう一つは、活動を、例えば企画なりなんなりをそういう方たちが参加しやすいものにするか、私はどちらかだなと思っていて、それで、社会教育主事のほうでいずみ学級という障害のある成人の方たちの活動をなさっているじゃないですか。あれも、障害があるけれども、そういう意味では活動としては、成人の方たちの社会参画、その人たちと一緒につながって、自分たちで運営していくことを目指してやっていらっしゃるじゃないですか。活動といたら、そういうようなものを社会教育のほうで何か考えられたらいいのかなと今ちょっと思ったんですけれども。

○事務局 募集はしているんですけれども、なかなかお手伝いをしてくれるようなボランティアの方というのは集まりにくいですね。

○委員 いずみ学級？ 結構いるじゃないですか。

○事務局 いますけれども、新規の方が毎年多く入っているというわけではないです。

○委員 私も入ったんですけれども、ちょこちょこ入っていますよ。

○事務局 ちょこちょこというか、人数は少ないですね。

○委員 みんな、お話を聞くと楽しい。だから、支援をする人たちも一緒に楽しいと言われているから、別に30代、40代がみんな30代、40代で集まるという感じではなくて、何か斜めの関係が、やっぱり私は地域で活動していてもすごくいいなと思うので、世代は斜めの関係で集まれるような場所か活動があればいいのかな、それを考えていくみたいなことなんですかねと思ったんですけれども、どうなんでしょうか。

○事務局 参考資料の一番後ろに、今までのようなP T Aとか町会・自治会みたいな所属

するコミュニティはもうだんだんなくなってくるだろうと、むしろ右側の緩やかなコミュニティ、趣味とか、そういうほうがだんだん増えてくるだろうと言われているんですが、そういう緩やかな、出入り自由で、あんまり縛られずにというコミュニティみたいなものをどうつくれるか。

それから、先ほど委員がお話しされた、例えばこども劇場も社会教育関係団体だと思いますから、まずは見ていただく。ミドル世代の演劇好きな方だっていらっしゃると思うんです。そういう人たちが見るということは、やっぱり興味を持っているわけですから、場合によっては演劇をやっていた、子どもたちに教えたいと、また違う役割で参加する、参画するということだってできると思うんです。ただ、いきなり参画してくださいと言うと、やっぱりハードルが高くなっちゃうので、そういう段階みたいな形ができてくるといいのかなという気はしますね。

○委員 まず行政サービスをきっかけとしてということなんですけれども、これは国士舘大学に行ったときにあったんですけれども、市民活動推進課のチラシなんです。60歳以上と書いてあるので、ちょっとぎりぎり、65まで5歳ぐらいしかないんですけれども、これを30代、40代という形で興味あるものにして集めて、土曜日とか、参加可能かもしれないと思うんですね。こういうのを、縦割りだと思うんですけれども横で連携して、30代、40代でつくっていただいて、今度はその人がちょっとした講師になって、この値段はこんなには取らなくても教えてみませんかみたいにしてやっていくというイメージが、課長が言っていたイメージに近いと理解していいんでしょうか。

○課長 まあ、そういうことです。ただ、役所なので、行政の目的ってそれぞれははっきりしているんですよ。生涯大学でいえば高齢者の方の生きがいがづくりが目的なので、そこに若い人は、縦割りの中では求めていないんですね。高齢者の方の生きがいを提供したい、そういうのを持ってもらいたいということでそういう事業をやっていますので、縦割りのところはあるんですけれども、高齢者であればそういったところに参画するチャンスがある。けれども、若いミドル世代たちには、その特化したような事業もないですから、役所の事業に参画するチャンスがないというのがあるんですよ。

そこにいかにきっかけを出してあげるかということが必要なかなと思っていて、そうすると、参加したタイミングで斜めの世代につながりが生まれていけば、彼らは、一般論として言われているのは、そんなにやたらめったらつながりたくはない、自分のつながるときにつながり関係だけでいいんだということですが、そういったニーズはあるにせよ、

何か参加したときに、いろんな世代とつながれる場を役所として提供していく必要があるのかなと思っているんですね。

どのようなことをやれば、その若い世代に刺さるのかということもありますし、それを提供した後で、何があればつながりが生まれるのかということも、いろんな活動をされている皆さんであれば、こういうことをしたらいいよと幾つか御意見がありましたけれども、そういったヒントがあるのかなと思いますし、団体の中でも、団体に対してこういうことをやったらもっと活動が広がっていきますよという周知を我々もできれば、ミドル期が参画するような地域のコミュニティがあらゆるところに広がっている状況をつくれるのかなと思うんですね。

だから、そのアプローチする切り口というんですか、今、幾つかあるなとは思っているんですけども、それを皆さんの日頃の活動を通して、思っていच्छやることをお聞きしたいなというのが今期のテーマのスタートです。

○委員 分かりました。学校では、けやきネットで学校開放をしていますけれども、先ほどの話と重複になりますが、いろんな団体が活動しているのに子どもが一緒に参加すれば、それで部活動として認めてもらう代わりに、例えば今けやきネットに払っているお金はちょっと幾らか免除するとか、そのような形もできるのかもしれないなというふうには思いました。

○議長 今、課長が言われたように、役所としてはミドルをターゲットとした企画をしたい。しかし、それはどういう内容であればミドルに刺さるのか、どうすれば、どういうふうなやり方をすればミドルに伝わるのかが分からない。だから皆さんのアイデアを欲しいということのようです。私は「それは虫がよすぎるのではないか。そうしたことを考えられないようでは、生涯学習課は、何のためにあるのですか」と苦言を呈しています。でも、そういうことのようなので、アイデアをいただきたいとのことでした。

○委員 そうですね、ちょっと痛みが伴っていないとか、何かよく分からないなというのが正直なところです。なぜならば、私、ちょっと極論を申し上げました、ちょっと乱暴な言い方になってしまいましたが、結局そこなんだろうと私はいまだに思っているんですけども、結局は半ばちょっときれいな形で、社会教育にミドルが参画してもらうことで、心豊かに充実した生活を送っていただける世田谷区を実現したいと、簡単に言えばこういうことですね。これを行政のサービスとして行うプランを何か考えてくれよと、多分こういうことだろうと思うんですけども、やっぱり議長と同じく、ちょっと痛みが

伴っていないというのが正直なところ。

○議長 例えば、学校という施設をいろんな形で使おうと思っても制約があるわけですよ。委員が言われたように、誰もが自由に使える、居心地のよい場所で、Wi-Fiが無料で使えて、コーヒーでも飲めたら、ミドル世代も集まるかもしれませんが、そういう施設がないわけですよ。

それから、例えば委員のアイデアもすごく面白いんですけども、制度設計が難しいですよ。いろんなご意見をいただくことはできるんですが、その後、どのように実現させていけばいいのか。

委員が言われたように、「新しい部活動」を構想して、地域の方たちが自分のやりたいことがやれて、そこに子どもたちが加わってくれたら、楽しそうですねよね。

○委員 今でも、サッカーとか演劇とかで、トライアルで地域学校連携課がやっているんですね。そのようなトライアルで今やっている状態なので、ゴルフでも何でも。僕は実は茶道をやっているんで、茶道をやりませんか、表千家の京都の不審庵とかにいろいろ電話して、東京の支部の先生とかにも連絡して、少し集めながら、地域学校連携課と相談しながら、やってみようかと話をしているんですが、それは僕が今この立場だから、ちょっと話をやりながらできるけれども、今言ったように、どんなことが得意かとかが全然分からないから、どんな形でできるか分かりませんが、10何万いるミドル世代のシングルの人がどういう力を持っているかが分からないとなかなかできないし、そういうところをどうやって集めてやるんだろうなという感じです。それでその人たちが、最初は別に部活動じゃなくても、そういう人たちだけが集まれるような何かシステムがあって、そこから地域の部活動につなげられたら理想だなと、ざっくり思っている感じです。

○議長 たぶん、そうした「理想」の部分は共有していても、いざ、具体的に進めよつとすると、どのようにターゲットにアクセスするかとか、データはどうするか、というような話になってくると思うんですよ。私としては、今日は意見交換でよいとしても、次回以降は、皆さんから何のアイデアを出してほしいのか、そして、どこまで実現できるようなものとして考えたらいいか、ということを事務局にも確認しながらやっていきたいと思っています。

○委員 それを今度は自分たちの活動の中でというのではなくて、世田谷区で何をやるかを考えてくるということでもいいんですか。

○事務局 もう1回事務局のほうでも検討させていただいて、今、議長が言われたように、どこまで実現可能なのか。例えば絵に描いた餅を皆さんに出していただいてもということですよ。ですから、どこまでできるのかも含めて、まずは事務局で考えさせていただいて、検討していきます。

○委員 今までの社会教育でなされた実績と現状を私は全部が全部知らないで、それもちょっと共有できたほうがいいかなと思うんですがどうでしょうか。

○事務局 第2回だったと思いますけれども、私どもの事業の一覧を御提示させていただいたところもあるんですが、それは参考になるかなと思います。

○委員 区民センターで講座をなさっているんですね。

○事務局 当課の事業ではないんですが、我々社会教育主事が勤務していて、総合支所の地域振興課の事業になります。

○委員 でも、このミドル期のシングルの人たちは、会社の中にいても、すごく苛酷な仕事をさせられていますよね。育休、産休を取っている人たちのしわ寄せがみんなここに来ていて、本当に余裕があるのかなというのが心配ですけれども。

○事務局 という方もいらっしゃるかもしれませんが、悠々自適でたっぷり楽しんでいる方もいらっしゃると思いますし、必ずしもいろんなことに不安を抱えながら生きている方たちだけではないかなとは思いますが。

○委員 だから私、運動を広げていくときには、やっぱりここから広げるしかないんですよね。運動と言ったらなんですけども、輪を広げていくときに。だから、本当に最後はこの辺の人に影響が行けばいいんですけども、ここを広げていくということかなと思って、そうすると、世田谷区の行政で、社会教育で何をなさっているか、何をしたいかということ私たちが一緒に考えていって、広げられるようなことを考えたほうが分かりやすいかなと。

○事務局 そうですね。今回、時間の関係もあって、全ての皆さんからというわけではないんですが、まずは既存の活動、皆さんがされている活動にどんなふうに関わってもらえるのかということをお願いしたところなんですが、来年度また、時期に関しては議長とも相談させていただくんですが、例えば委員であればこども劇場の取組、あるいは委員だと子どもぶんか村、委員だとおやじの会、そういうところで試行的にもしお願いできるのであれば、ミドルの方たちをどんなふうに取り込むことができるのか。また次回、その結果、1人でも入ってきたよなのか、なかなか難しいなどをお聞かせいただければと

思います。

○委員 参加費を30～50歳の人はお安くしますとチケットを売るとか。

○事務局 これは我々の事業だけではなくて、社会教育関係団体の皆さんもそういう取組をやっていただいて、もし参考になるようであれば、ぜひそういうこともお聞かせいただければと思っています。必ずしも当課の事業だけが全てというわけではないので。皆さんがされている活動は社会教育に関する団体になってきますので、ぜひそういうことも含めて一存ではなかなか難しいところもあると思いますので、あるいは安全面のことも含めてですけども、もしできるようであれば、そういうことも含めてやっていただければと思います。

○副議長 もうこれ、今年度最後なんですよ。今日、議論を聞いていて、はっきり言ってミドル世代のニーズを捉え切れていないというのはもう決定的だと思うんですよ。それを把握する心積もりというのはないんですか、次年度以降。

参考になるなと思ったのは、今日配られた資料3、これは奇跡的に基礎資料としてよかったなと思うんです。これ、特別区長会の調査ですか。

○事務局 そうです。

○副議長 それこそミドル期世代を対象にした。これの一番参考になるのは、問9とか問8とか問10辺り。例えば「問10. あなたは、今後、地域の団体や集まりに参加したいと思いますか」に対して、「とても参加したい」、「ある程度参加したい」で25%ぐらいいるんですよ。4人に1人ぐらい。だから、希望は多少あるなというところで、明確に「参加したくない」は35～36%なんですよ。「どちらともいえない」が38%なので、何かちょっとしたきっかけがあれば、それなりの参加は見込めるであろうと。

それが問9なんですよ。「どのようなきっかけがあれば参加しますか」。まず「友人・知人のすすめ」、「区の広報誌やHPなどからの情報」。だからさっき言った、どういうふうな広報手段がいいかというのは、まさにミドル期世代のニーズに合った形で、インスタとかXとかいろいろあると思うんですけども、やっていかないといけないし、さらには本当に特化した、もう世田谷のミドル期世代、これ、見てください、お得な情報いっぱいありますぐらいのことでやらないと駄目だろうなと思うんですよ。あとは、皆さんたちが所属しているような活動団体からの呼びかけとかも1割ぐらいはあると思うんですけども、どの程度のニーズをちゃんと捉えられるかというのは、やっぱり詳しくやっていかないと駄目なんじゃないかなと。

問 8 なんかは多少それが読み取れるようではございますけれども、やっぱり「趣味の会習い事・勉強会」、少ない割合ではございますけれどもというところで、だから、ちゃんとそのニーズが捉えられるようなことはできないんですか、この社会教育委員の会としては。

やはり皆さんたちからいろいろ御意見いただいて、議長もおっしゃっていましたがけれども、ここまでいろんな意見交換をして、この先に何があるんですか。それが見えないと、何のために夜遅く集まっているんですかという話になるじゃないですか。そこだと思えますよね。なので、もし次回、次年度以降もこのテーマで取り組むのであれば、やはりちゃんとニーズ把握は必須かなと思うんですよね。その先に多分いろんなところが出てくると思う。

○事務局 例えばアンケート調査みたいなことを。

○副議長 そうですね、こういうのを参考に。特別区長会はどのように世田谷区をやったか分かりませんが、どのようなことがあれば参加したいのか、なぜ参加したくないのか。例えば自分たちの仲間同士であれば、さっき言ったインセンティブ、けやきネット優先予約とか、あと、それこそおっしゃった、世田谷区内在住の勤の人が3人以上集まって週1回活動していれば、活動費として月1,000円でもいいからあげますよとか、そういうのがあれば果たしてやるのかとか、いろんなニーズというか、そういうのは把握したいですよね。

それがなければ、ここにいらっしゃる方はみんな既存団体の人たちなので、多分限界があると思うんですよ。先ほど事務局は、こども劇場とかぶんか村で若い人に声をかけてと言いましたが、何かイメージがあるのかなと。いや、ちょっと難しいですよね。なので、やっぱり何かしらの形でニーズを把握する必要があるだろうと思うんです。私からの意見は以上です。だから、これはある意味、貴重なデータですよ。

○事務局 そうですね。令和元年ということで、最新ではないですが。

○副議長 ちょっと古いではございますけれども、いや、でも、貴重な資料だなと思いました。

○事務局 もう一度、そこら辺も含めて事務局で検討させていただきます。その結果、議長とも相談させていただいて、また次回、報告をさせていただければと思います。

○議長 予定の時間になりました。今回は事務局より資料を提供していただいて、ミドルシングルの共通理解を深めて、意見交換したということで終わってしまいましたが、事務局には、来年度に向けて、ここで何を議論していくのかをもう一度整理していただくことをお願いして、次回につなげたいと思っております。

○委員 次回はいつですか。

○事務局 改めて調整させていただきます。

○議長 ありがとうございました。

午後 8 時31分閉会